



アフガニスタンの砂漠に用水路を拓く

“紛争の地”というイメージが強いアフガニスタン。深刻化する干ばつの影響で、大地から緑が消え、多くの人々が難民となり、故郷を離れざるを得なくなった。水がないことが病気を蔓延させ行き場のない人々を戦闘に向かわせた。当地で1984年から医療活動を行ってきた医師、中村 哲さんは「百の診療所よりも1本の用水路を」を合言葉に、2003年無謀と思われた用水路建設事業に挑む。16年におよぶ壮絶な取り組みから語られたのは、未来に向けて今考えなくてはならない「人間と自然との関りだ」

温暖化による“大干ばつ”、穀倉地帯は褐色の大地に変わり、木々は立ち枯れた。「まるでガン細胞が広がるように干ばつが広がり、村が文字通り消えた」診療所で医療活動に従事しながら飢えと脱水、それに伴う感染症で力尽きる命を目の当りにし「薬で飢えは救えない」ことを痛感する。

江戸時代の石張りの「斜め堰」を導入

重機もコンクリートも必要とせず日常的にできる技術で用水路を築く。壁の施工には「蛇籠工」を採用した。蛇籠の背面にはたくさんのヤナギを植えると無数の根が石の隙間に入り込み鉄線が腐食したあとでも、ヤナギの根は護岸の石積をしっかりと抱え込んだ。これも昔の人の知恵だ。

“もの”のように自然を扱うと、やがてしっぺ返しがかかる

褐色の大地に1本の用水路が通ったことで、当地の緑は蘇った。しかし依然として、山の頂から雪が消えつつあり、温暖化による気候変動はもはや地球全体に及んでいる。人はいかに自然と和解していったらいいのか。

経済成長を止めるのが唯一の解決策

急速に進んでいる温暖化の解決策を聞いた。「化石燃料依存社会を脱して工業生産を伸ばさず、まずは、定常状態の維持です。経済成長が続く限り地球は温まる」「自然界を無視して、人の都合で物事を決めていくかぎり解決できないでしょう」「アフガニスタンで我々が用水路を通しての意味がここにあります。それによって、みんなが帰農でき、食べていくことができます。平和な手段で確かに生き延びれるという、希望を示すのです」「ここまで上がったCO₂の濃度を下げるのには何世紀もかかる。その間、どうやって生きぬくかという問題を、この用水路事業が担っていると考えます」

人は地球を自分たちが住めない環境にするのか、緑の大地にして次世代につなぐことができるのか、いま問われている。



蘇る緑の大地 中村 哲さんに聞く 自然栽培 より

中村 哲さんが銃弾に倒れる前に取材した内容です。昨秋の台風・大雨の災害、これからも頻繁に起こりえるなかで、中村 哲さんが訴える、話す言葉は胸に突き刺さります。

菅平米園 園主 須田 正一